研究調査報告

『日本近世生活絵引』南島編編纂共同研究

八重山蔵元絵師画稿

得能壽美
（非文字資料研究センター研究協力者）

『日本近世生活絵引　南島編』は、昨年度（2011 年度）から 3 年にわたって、大きく 3 つの絵画資料の検討を進めている。初年度は、そのうちの「八重山蔵元絵師画稿」について、何度かの勉強会を重ねたうえ、2012 年 2 月 24 日から 26 日の日程で、「八重山」の現地調査を行った。参加者は、渡辺美季氏（非文字資料研究センター研究員）、富澤達三氏（非文字資料研究センター研究協力者）と筆者。渡辺氏は八重山経験があるが、富澤氏は初体験とのこと。

1．「八重山蔵元絵師画稿」について

いくつか予備的な情報をまとめると、「八重山」は沖縄県の最南西端に位置する島々の総称で、石垣島・西表島・竹富島・小浜島・黒島・新城島・波照間島・鳩間島・与那国島などからなる諸島の名称になっている。前近代（王府時代）は八重山島が行政区画名として用いられ、明治期には全域で八重山郡となった。現在は、石垣島の石垣市、与那国島の与那国町と、多島嶼からなる竹富町があり、石垣市は尖閣諸島を含む。

「蔵元」は、王府時代の八重山島の行政府で、はじめ竹富島に置かれ、のち石垣島に移されて何度か移動したが、最後は現在の石垣市立八重山博物館の南西側の地にあった。

その蔵元に「絵師」がおり、次のようにいわれる。

> 彼等が特に重んぜられたのは、在番奉行や頭などが蔵元管内の各島村を監視巡回の旅に立つ、いわば「親廻り」の時に随行員の一員として行動をともにすることであった。そしてこの各島巡回の際には地図の調整はもとよりその他命をうけるままに筆写の任に当るのである。さらにこの絵師の最も重要な役務の一つに来島異国船の報告資料の作成があった。公文書は蔵元の筆者などが取扱ったが、絵師は必ず通事とともに漂流漂着の難破船の船着場にかけつけ、これ等の異国船の船形の実写はもとよりその他異国人の肖像・風俗画などを正確に写し取って首里王府へ報告したのであった…その他蔵元内の人頭税の上納貢布の各村へ配布する図柄の作成、また御嶽仏閣などにおける壁画も殆んど彼等絵師の筆によるものが多い。また旗頭の図案中にもそれが多く遺っている。いずれにしても公的な絵画に関する一切の任をこの絵師が担っていたのであった。勿論先記したごとく当時の蔵元政庁には常時絵師が 2 人ずつ勤務していたのである。（喜舎場永珣「蔵元政庁の絵師」／『八重山民俗誌　下巻』沖縄タイムス社　1977 年 379 頁）

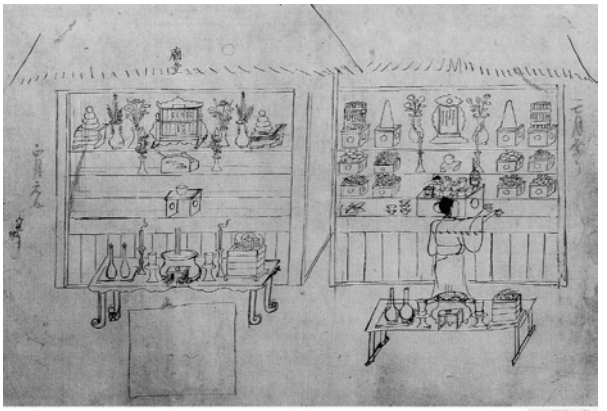
「八重山蔵元絵師画稿」は、かつて「八重山風俗図」と称され（『沖縄大百科事典』など）、大正 12 年沖縄県女子師範学校などの教員であった鎌倉芳太郎氏が、琉球芸術の調査のために石垣島を訪れ、最後の絵師であった宮良安宣から譲り受けた。その後、鎌倉氏は東京美術学校教官を経て、東京で紅型の制作にあたり、昭和 48 年重要無形文化財「型絵染」保持者（人間国宝）となった。「八重山蔵元絵師画稿」は、同 52 年同氏から石垣市立八重山博物館に寄贈され、平成 23 年沖縄県有形文化財に指定された。全 114 点からなり、近世末の民衆生活などを描いた作品が多い。

2．旧家の仏壇調査

今回の調査では、「八重山蔵元絵師画稿」の現物を確認することと、八重山歴史研究会の会員を中心に聞き取りをすることを大きな目的とした。また、「画稿」№.24 に描かれた仏壇の飾りについて、旧家の仏壇を実際に拝見するという機会を得ることができた。

調査の順に記せば、2 月 24 日午後一番に石垣空港に着き、市内大川にある森田家におじゃました。亡くなられたご当主の森田孫榮氏は、八重山文化、とりわけ芸能・民俗に造詣が深く、著書に『八重山芸能文化論』などがある。旧家の格式を保持する同家の仏壇についても、か

ねてからお話をうかがっていた。現在、同家を管理される親族の方の説明を受け、「画稿」№.24の飾り物について、多くのことを確認することができた。とりわけ、左側上から２段めにある龍が巻いている蝋燭など、「画稿」の世界が生きていることには感動した。旧知であることに甘えさせていただいた部分が大きかったが、もちろんウートートー（位牌への祈り）もして、孫榮先生にご理解をいただいた（つもりである）。



24　仏壇の飾

その後、竹富町教育委員会の竹富町史事務局、石垣市総務部市史編集課を訪問。竹富町の役場や教育委員会などは、竹富町域になく、各島嶼からの交通の便のよい石垣島（石垣市）に置かれており、森田家からは徒歩５分。「画稿」研究や町史最新刊の『竹富町史　第二巻　竹富島』などについて、通事孝作氏、飯田泰彦氏と情報交換をさせていただく。さらに徒歩１～２分で、石垣市役所庁舎にある石垣市総務部市史編集課へ。課長（当時）の松村順一氏の会議終了を待って、「画稿」研究をはじめとする最近の八重山研究についての情報交換をした。夜、西表島のイノシシ肉などに舌鼓を打つなど、八重山飲食文化の研究を存分にしたことは、調査報告で取り上げる内容ではない。

３．「八重山蔵元絵師画稿」の実見と聞き取り調査

翌25日は、午前中、八重山博物館での「画稿」実見。館長（当時）の宮良芳和氏にご挨拶をしたのち、学芸係長の島袋綾野氏に現物を見せていただく。

「画稿」は複写版が八重山博物館から発行されていて、事前の勉強会ではそれを使用したが、細部にわたって確認しなくてはならないことがいくつか生じたため、主としてその点についての調査となった。やはり実物は迫力があり、それまで見えてなかったことが、浮かび上がってくるようだった。

同館は筆者のもとの職場であるので、同行者に館内を案内し、「画稿」に描かれたモノの現物を紹介した。森田家の仏壇もそうだが、絵画だけでなく、現物が残っている。場合によっては今も使用されているという「文化」はすばらしい。この後、クバ笠をはじめ、いくつかの「画稿」モノが土産物店で無造作に販売されているのを見て、同行者たちは驚くことになる。

徒歩７～８分で、石垣市立図書館へ。郷土関係図書担当の石垣司氏の案内を受け、郷土資料室を拝見、その後、書庫に入れさせていただき、関係書籍などを閲覧した。

午後は、石垣市文化協会の事務所にて、聞き取り調査を行う。八重山歴史研究会の石垣久雄氏、川平永光氏、登野原武氏、石垣英和氏、石垣市文化協会の前津栄信氏、上地貞昭氏である。神奈川の研究室で呻吟していたことが、「あっこれはアレ」と、即座に説明と方言が出てくる。たとえば、№.46、船に乗った人物が両手に１本ずつの棒を持って、その先を海中に入れている図は、「２本持っているのはタコ獲り」と速答。№.43、収穫した稲藁を保管するシラ（稲叢）を作っている横に描かれた木を組んだモノは、ずっと何だか不明で、著者は『八重山人頭税廃止百年記念誌あさぱな』(南山舎　2003年　181頁)で誤ったことをいってしまっている。「これはシラの土台だ」と、わずか数分のことで氷解、などなど。モノも使われていれば、経験知も残されているのである。

夜は、地元出版社の南山舎の方々と情報交換をしつつ、楽しい飲食文化研究を。最終日は、富澤氏と著者は雨の竹富島へ。島の感覚を、少しはご理解いただけたか？

竹富島を理解するといえば、前日、竹富島の「種子取の歴史と変遷を考える」という全国竹富文化協会による星砂の島文化講演会が、石垣島で開催されていた。パネラーは、聞き取りの中心となっていただいた石垣久雄氏をはじめ、阿佐伊孫良氏（元竹富公民館長）、狩俣恵一氏（沖縄国際大学教授）。孫良さんには、竹富島から戻った石垣港離島ターミナルでばったり。会の様子をうかがうことができた。

年度末近くのご多忙の時期に、多くの方々にお時間をつくっていただき、また、大きな成果をいただき、たいへん感謝しています。地元とつないで、我々の成果としてきちんとまとめるという重責を感じつつ。